

# 新潟市 秋葉区 農業委員会だより

第 51 号

令和 3 年 1 月 1 日

編 集 ・ 発 行

新潟市秋葉区農業委員会

電話(0250)25-5525



白鳥の飛来（荻川地区にて）



## 新春のお慶びを 申し上げます

会 長 小 倉 栄 造

新年明けましておめでとう  
ございます。皆様方には、日  
頃より農業委員会の活動にご  
理解とご協力をいただき心よ  
り感謝を申し上げます。

昨年は、二月頃から新型コ  
ロナウイルス感染症の発生が  
大きな問題になりました。そ  
の後、一時発生が抑えられて  
いましたが、冬に入り再度感  
染が拡大し、収束の目途が立  
たない状況です。感染の拡大  
は世界中におよび、人々の生  
活や産業、経済や私たちが仕  
事とする農業にも大きな影響  
を与えています。

感染防止のための外出自粛  
や三密回避のための人々の行  
動変容で、飲食業などは大き  
なダメージを受けており、それ  
に伴い米の需要にも大きな変  
化が出ています。

今後も感染終息が見通せな  
い中で、皆様方には感染対策  
を十分に実施し、健康に気を  
つけて生活していただきたい  
と思います。

さて、昨年の新潟県の米の

作況指数は最終的に一〇三と  
なり、三年ぶりの豊作となっ  
たところですが、人口減少や  
新型コロナウイルスの影響な  
どもあり、米の需給は大きく  
緩和し、米価も下落しました。

また、本年、国が示す主食用  
米の適正生産量は、前年の実  
際の生産量約七二三万トンよ  
り三〇万トン程少ない約六九  
三万トンとのことですので、  
この数字をクリアするには更  
なる水田フル活用と主食用米  
以外への転換が必要です。特  
に、園芸への転換には、国や  
県、市も補助金等により支援  
を行っていますので、今後は  
これらを活用し、私たち農家  
も園芸等に取り組んでいく必  
要があると思います。

秋葉区農業委員会では、こ  
れからも農地利用の最適化と  
人・農地プランの推進に一層  
注力して参りますので、農家  
の皆様の変わらぬご支援とご  
協力をお願い申し上げます。

最後に、皆様方のご健勝と  
ご多幸を祈念いたしまして年  
頭の挨拶いたします。

この記事は、昨年から実施しています「秋葉区女性農業者のつどい」が新型コロナウイルスの影響で本年度中止となったため、今回、新たに取材し掲載したものです。また、記事の掲載にあたっては、新潟市秋葉区農業振興協議会様から多大なるご支援をいただきましたこととお礼申し上げます。

## もったいないを喜びに変える 「農福食連携おいしいプロジェクト」とは？

果樹や野菜を作っている農家の1軒あたりから出る規格外の作物は、収穫量全体の2～3割もあると言われています。これらの規格外品は、その多くが形や大きさが規格に合わず、一部が直売所で安価に販売される以外、市場に流通できないもので、新潟では「ハネモノ」として自家消費とするか破棄される運命にあります。

今、社会的にフードロスの削減が叫ばれていますが、これらの「ハネモノ」を活用し、食材として使用していくことがフードロスの削減と併せ持続可能な農業を実現していくためには不可欠ではないでしょうか。

一方、全国で広がりを見せる「農業」と「福祉」の連携は、障害を持つ人々の就労場所の確保や高齢化に伴う農業従事者の減少などの地域課題を解決するための一つの手法として注目されています。

これらの諸課題をまとめて解決しようと日々活動している人がいます。新潟市東区でC's Kitchenを運営する代表の佐藤千裕さんです。

今回ご紹介する佐藤さんは、「農福食連携」通じ、規格外の農産物を使用した事業展開を行っており、豊かな自然環境を次世代へつなぎ、サステナブル（持続可能）な未来の実現に向けて活躍されている一人です。

秋葉区農業委員会では、佐藤千穂子委員と佐々木和美委員がC's Kitchenを訪問し、佐藤千裕さんの活動における日々のご苦労や今後の抱負などについて聞いてきましたが、佐藤千裕さんからのメッセージをいただきましたのでご紹介いたします。



(写真) 左より佐々木委員、佐藤千裕さん、佐藤委員

## もったいないをよろこびに変える 農×福×食連携おいしい循環プロジェクト 「つくルコト・たベルコト・つながルコト・いきルコト」＝「rucoto(ルコト)」

C's kitchen 佐藤千裕

東区にあるシーズキッチンのアトリエは、いつも旬の果物や野菜のコンテナでいっぱいです。主に新潟市を中心に地元の農家さんにつながって直接仕入れた旬の野菜や果物を使って、キッチンカーでのかき氷店の運営、ケータリング、焼菓子やジャムの製造、食育ワークショップ、レシピ考案など、食を通じた様々な活動をしています。

今年で活動も10年目になりますが、生産者さんとのお付き合いの中で、市場には出せない規格外のハネモノを活用できないかという相談を多くいただきました。特に、小規模の生産者さんは加工に回すルートが無いために、泣く泣く廃棄せざるを得ない現状を、私達でもっと何とかできないものかと悶々とした想いを日々抱えながら弊社のスタッフみんな加工してきましたが、とても仕込みが追いつかず、救えるハネモノ

ノはほんのわずか。そんな中、つながりのあった福祉事業所さんに1次加工を手伝ってもらえませんかと相談し、7年ほど前から数件の施設さんと、加工の指導提案をし、練習を積み、データを取り、少しずつ試行錯誤しながら歩んできました。

こうして「rucoto」の活動は2018年に、「農福食連携おいしい循環プロジェクト」として、クラウドファンディングで資金を集め、約150名の方々から賛同をいただき、本格スタートして今に至ります。

「とりあえずやってみなきゃわからないだろう！」と走り出したものの、いざスタートしてみると、様々な課題も出てきました。農作物の旬の時期は意外に短く、福祉事業所の利用者さんがようやく作業に慣れてきたかな、という頃にはもう旬が終わり、また1年後になってしまうこと。農家さんによって、ハネモノの程度が異なるため、傷みや形により加工が難しいものは取り除かなければならないこと。過熟や未熟のものが一緒に混ざっているため、もう一度選別しなおして一定の熟し具合のものに揃える必要があること。その年によってほとんどハネモノが出なかったり、台風の被害で大量に出たり、なかなか仕入れや仕込みの予測がつかず計画が立てられないこと等々・・・



加工作業を委託することは、決して簡単なことではないですが、それぞれの福祉事業所の既存の調理設備や利用者さんの特性に合わせて、無理なくよいものが作れるように指導や提案をしています。

おいしいものを作るって、楽しくてうれしいこと。食に係る仕事は、飲食業の料理人だけのものではなく、みんなで力を合わせて携わり、多くの方と喜びを分かち合えたらこんなに嬉しいことはありません。

現在は、農産物加工を委託している福祉事業所さんが6～7か所。越後姫や桃や梨などの果物や枝豆、大

根、玉ねぎなどの野菜、これら果物や野菜の規格外品をみんなの力を合わせて美味しく生かして、弊社アトリエでメニュー考案し、加工して商品に仕上げています。

また、こうしてみんなの力を生かして一次加工したものは、飲食店などの人手不足問題の一助となると考えています。四季折々の豊かな食材の恵みにあふれたこの新潟で、いかしきれず廃棄される素材が沢山あるにもかかわらず、多くの飲食店では、人手不足のために仕込みに手間がかけられず、海外や県外産の手軽な加工品・既製品を使わざるをえない現状があるのです。

rucoto のつながりで一次加工した素材は、弊社アトリエでさらに加工し、フルーツソースやジャムなどになり、rucoto の取り組みに共感してくださるカフェやパン屋さんにも卸しています。また、これらのお店では、地元新潟の旬素材を使った商品としてそれぞれのお店の味としてさらにおいしく生まれ変わります。

飲食店にとって手間のかかる仕入れ、下処理、仕込みの労力を rucoto のつながりで分散し、地域の中で循環させることで輸送にかかるコストやフードマイレージ（食料の輸送距離）を減らし、環境への負荷を減らすことにもつながると考えています。

農と福祉と飲食のプロが繋がり、素材や個性や能力をいかし合うことでおいしい循環を生み出し、各分野の問題解決にもつながる。この「rucoto」プロジェクトを通じて、私たちの日々を支える大切な食べ物、そしてその価値をみんなで分かち合い、未来にまあるくつながる社会の仕組みを創りながら、地域と一緒に少しずつ歩んでいけたら。そして、そのおいしい循環がこれから先の未来には当たり前となり、なという想いで、これからも日々の活動をひとつひとつ積み重ねて参ります。



# 委員のリレートーク



農業委員  
長井 範親

稲刈りも終わり、収穫を終えた田んぼでは落穂を食べる白鳥の姿を見ることが多くなりました。

この時期、農業委員会には農地の利用権設定や売買など多くの申請があります。その理由は、農地の集積・集約を図る目的や経営規模縮小・離農など様々です。

また、近年、農業就業者の高齢化が大きな問題として各種報道で取り上げられています。私の集落でもやはり高齢化が顕著であり、農家戸数は年々減少しているところです。集落内の農地面積は約一〇〇haで、今後、更なる農地の集積・集約化を進めれば、地域農業は維持していけると思っています。しかし、マンパワー

が必要な農道や農業用排水路の恒久的な維持・管理については大きな課題として残ります。

その解決策として、私たちの集落では、農家と集落住民が一体となって農村地域の環境保全に取り組み団体を立ち上げ活動をしています。活動は、農道の草刈り、藻払いのほか、農道の補修、農業用排水路の長寿命化工事（U字溝敷設）など多岐にわたります。

他集落でも環境保全団体はありませんが、長寿命化工事まで自主施工している団体はあまり聞いたことがありません。団体構成員の中に土木作業経験者が数名いるから施工可能なのでしょう。

私がこの環境保全活動に参加しているのは、集落で耕作している専業農家という立場からだけでなく、この場が農業委員として大変重要な情報発信・情報収集の場になっているからです。例えば、「〇〇さんが体調不良で畑の管理ができなくなってきている。」と情報が入れば、耕作者、農家組合、環境保全団体等と協議し対応することで、耕作放棄や遊休農地化を避けることができます。往々

にして、そのような情報を収集できるのは「会議の場」や「アンケート調査」ではなく、共同活動での休憩時間の何気ない会話の中にあります。情報に溢れた「休憩時間」を楽しみに、今後もこのような活動に参加していきたいと思っています。



農地利用  
最適化推進委員  
吉澤 悦雄

令和二年は、新型コロナウイルスの蔓延で始まり、四月に第一波、八月に第二波、一二月に第三波と流行し続いています。おかげで、人が集まる会議・講習会・研修会等が全て中止で寂しい限りです。

さて、私は、農地利用最適化推進委員の制度が始まった平成二八年四月から同委員に就任させていただきました。一期三年で現在二期目も半ばを過ぎましたが、最初の頃はこういう仕事をしたら良いのか分からず戸惑っていました。しかし、その後、

研修や講習を受けるとともに事務局や先輩農業委員の皆様のもとで何をやるべきか見えてきました。

まず、第一に荒廃農地や農地の無断転用の防止・解消の仕事です。私も普段から担当地区の見回りを行っています。農業委員会でも秋葉区全体について年二回の定期的なパトロールを行っています。その甲斐あって、荒廃農地は年々減少傾向にあります。

また、近年、私の集落では、農家の高齢化と後継者問題がよく話に出ます。併せて、農地の貸借や売買の話も話題になります。

これらの問題を調整し解決に導いて、最終的に地域の担い手への農地の集積・集約に繋げることが、私たち農地利用最適化推進委員のもう一つの重要な仕事です。

それを推進するためには、とにかく話合いが第一だと思っています。問題解決の手法は色々考えられますので、必要がありましたら、私ども推進委員に是非ご相談ください。

令和三年は新型コロナウイルスが下火になり、東京オリンピックが開催されますよう心から祈っています。